

リニューアル赤れんが庁舎は何を物語るか?その1



杉浦 正人 (すぎうら まさと)

札幌建築鑑賞会 代表

1959年、愛知県生まれ。1982年、北海道大学教育学部卒業(社会教育・生涯学習論)。1991年、「わが街の文化遺産の再発見」をテーマとして学ぶ市民グループ・札幌建築鑑賞会を発足させ、代表を務める。「大人の遠足」「古き建物を描く会」などの行事を続けてきた。2023年から北海道新聞別刷「さっぽろ10区」に「札幌建物探訪」を連載。2024年、『さっぽろ探見 ちょっとディープなまち歩き』を刊行(北海道新聞社)。

はじめに

北海道庁旧本庁舎は「赤れんが庁舎」の愛称で親しまれ、北海道のシンボルともいえる建物です。2019年から5年余りに及ぶ規模改修工事を経て、2025年7月25日にリニューアルオープンしました。

リニューアルした建物(以下「赤れんが庁舎」という)は何を物語っているのでしょうか。赤れんが庁舎の価値を二つに分けて鑑みたいと思います。一つは「建物そのものの価値」であり、もう一つは「建物が周辺にもたらした価値」です。今回は一つ目の「建物そのものの価値」について述べます。

まず、赤れんが庁舎の基本的な情報を以下、お伝えします。



リニューアルオープンした赤れんが庁舎

① 主なできごと

1873(明治6)年	開拓使札幌本庁舎 竣工
1879(明治12)年	札幌本庁舎 焼失
1888(明治21)年	北海道庁本庁舎(赤れんが庁舎) 竣工
1895(明治28)年頃	八角塔撤去
1909(明治42)年	赤れんが庁舎火災
1911(明治44)年	赤れんが庁舎復旧
1968(昭和43)年	北海道百年記念事業で復原改修(八角塔などの復原)
1969(昭和44)年	国の重要文化財に指定
2019(令和元)年	大規模改修工事開始(令和の大改修)
2025(令和7)年	改修工事終了 リニューアルオープン

② 構造

煉瓦造 2階建て(地下1階) + 八角塔、高さ約33m(八角塔まで) 現在のビルでいうと10階建てに相当

③ 設計者

平井晴二郎(北海道庁土木課技師) 1856(安政3) - 1926(大正15)

赤れんが庁舎の見どころ

(1) 八角塔

建物の価値を鑑みる前に、赤れんが庁舎の見どころを探訪しましょう。リニューアルによって内部の展示物も一新され、見どころは盛りだくさんになりましたが、私は建物そのものに注目して、お薦めを三つだけ紹介します。まずは八角塔です。

八角塔はこんにち、赤れんが庁舎をもっとも印象づける要素といえますが、当初の設計にはありませんでした。時の北海道庁長官・岩村通俊^{いわむらみちとし}の“鶴の一声”により、建築の工事が進んだ段階で付け加えられたといわれます。岩村の脳裏には開拓使札幌本庁舎の大きな八角塔が残っていたようです。

結果的には構造上無理があって数年後に取り外され、八角塔が復原されたのは1968（昭和43）年です。つまり赤れんが庁舎は塔の無い時代が70年以上と長かったのですが、こんにちの赤れんが庁舎を見たとき、八角塔のない姿は考えられません。

その八角塔は従来非公開でしたが、このたびのリニューアルを機に立ち入りできるようになりました（入場料とは別に追加料金と要予約）。これには個人的にちょっとした思い出があります。1991（平成3）年、札幌建築鑑賞会で初めて、赤れんが庁舎を含む札幌の歴史的建物を見学する行事を開催しました。その際、ガイド役を務めてくださった越野武先生（当時北海道大学教授）の計らいで、八角塔の内部に登頂させてもらったのです。1968年の復原に携わった越野先生の神通力で、北海道に特別のお許しをいただきました。

このたびのリニューアルでも、当初公開は難しいとみられましたが、実現にこぎつけました。30年余り前の私たちの特別内覧がその伏線となったのかもしれない。

八角塔の外に出てバルコニーからの眺望も楽しめるようになりました。札幌市街の遠望とともに、赤れんが庁舎の細部意匠も目の当たりにできます。1968年にやはり復原されたアイアンレースの柵や換気塔など、きめ細かい造作を至近距離で堪能してみたいのではないでしょうか。



バルコニーからの眺望

(2) メタルシーリング

メタルシーリング（金属天井）が各室や廊下に異なる模様で貼りめぐらされています。

1909（明治42）年の火災では、本体の煉瓦は残りましたが、内部は焼失しました。舶来のメタルシーリングはその後の復旧^{しゅうりゅう}で設えられたものです。内部の耐火性を高める目的もあったようですが、実際に使われた金属板は薄く、防火の役目を果たせたか疑問視されます^{*1}。とすると、この造作はどのように評価できるのでしょうか。

私は「近代工芸の進化の産物」として鑑みます。それまでの建物の内装は主には漆喰^{しつくい}であり、左官職人による手作業の技でした。メタルシーリングは機械（プレス成型）による量産化を実現し、職人の手作業では困難を極めたであろう天井の広範囲にわたって、デザイン的な美しさをもたらしたのです^{*2}。戦前期までのメタルシーリングが施された建物は、管見の限り札幌



模様を打ち出したメタルシーリング

*1 羽深久夫札幌市立大学名誉教授のご教示。

*2 北室かず子『赤れんが庁舎物語』2018年ではメタルシーリングを「当時は手仕事で打ち出したのだろう」と述べるが（p.40）、手仕事は考えづらい。

では赤れんが庁舎のほかにはもう一軒だけです。全国的に見ても、明治時代の建物で現存するのは稀少^{きせう}です。

(3) トンネルヴォールト

地下の元ボイラー室では、煉瓦をアーチ状に積んでいます。いわゆる「トンネルヴォールト」で、赤れんが庁舎では1、2階の各室には見られない構造です。なぜ、ここだけこのような天井にしたのでしょうか。

ヴォールト天井は、一般にはやはり耐火性を高める目的がありました。煉瓦や石造の建物でも、天井や床に木材が用いられていると火災を生じる恐れがあります。実際、赤れんが庁舎も前述のとおり火災で内部は焼失しました。英国の産業革命時、煉瓦造の工場で火災を防ぐために用いられたのがヴォールト天井です。木材と違って煉瓦を積むので、アーチ状に組む必要がありました。

この部屋がもともとボイラー室であったことからすると、あえてこの部屋のみ耐火性の高い内部構造にしたことが頷^{うなず}けます。札幌では、後述する札幌麦酒会社などの煉瓦造の工場でヴォールト天井が設けられました。赤れんが庁舎のトンネルヴォールトが創建時の設置だとすると、それらの先駆けとなったといえます*3。



地下1階の元ボイラー室

赤れんが庁舎の価値

(1) 地元の建材のたまもの

本題である赤れんが庁舎の「建物のそのものの価値」について3点、述べます。一つ目は地元の建材を用いて建てられたことです。

*3 北海道総務部編『重要文化財北海道庁旧本庁舎復原改修工事報告書』1970年でこのヴォールトの設置は「明治35年以前」の「大改修が行なわれたあたり」と推察されたのに対し、廣田基彦『重要文化財北海道庁赤れんが庁舎記』1999年では創建時と考察されている。ただし廣田はトンネルヴォールトの目的をボイラー設備の高さを確保するためだったとも述べている。

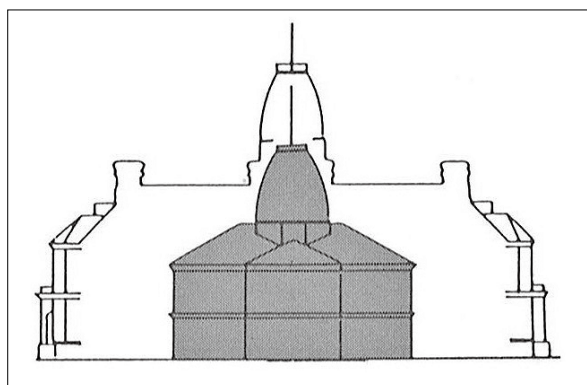
明治初期、開拓使の洋風建築は木造が主体で、規模が限られ、燃えやすいという弱点がありました。その弱点を克服したのが煉瓦造です。明治10年代には白石村（現在の札幌市白石区）に煉瓦製造場が設けられました。

試行錯誤もあったようですが、質の良い煉瓦が地元で大量に供給されたことで、大規模な建築が可能となりました。赤れんが庁舎に使われた煉瓦は250万個といわれます。



開拓使札幌本庁舎 明治6年撮影、北大附属図書館蔵

上の写真は赤れんが庁舎の前にこの場所に建てられていた開拓使札幌本庁舎です。写真を一見しただけではわかりづらいのですが、赤れんが庁舎とは建物の規模が大きく異なっていました。その違いを示したのが下の図です*4。木造の開拓使本庁舎に比べて、煉瓦造によって一回りも二回りも大きくなったのです。



開拓使札幌本庁舎（内側の網掛け）と赤れんが庁舎（外側の輪郭）の規模

*4 出典：小原莊治郎『赤れんが庁舎史話』1988年、p.114。

(2) 日本人技術者のたまもの

価値の二つ目は、本格的な規模と最先端の建築様式が日本人技術者の手で完成したことです。

北海道では開拓使時代も、日本人の棟梁^{とうりょう}が建物を建てましたが、前述のとおり木造が大半で規模が限られました。中央官庁を見渡すと、煉瓦造の比較的大きな建物は見られますが、お雇い外国人の手になるものです。

赤れんが庁舎は、日本人技術者によって煉瓦造の大規模な、しかも様式上もすぐれた建物を完成させたことで画期的でした。これは米国に留学して当時最先端の建築を学んだ平井晴二郎（北海道庁土木課）の力量によります。全国的に見ても、当時（明治時代の中頃）の公共建築の中で、赤れんが庁舎は群を抜いていました。平井の力量とともに、北海道を重視した政府の位置づけも大きかったのではないのでしょうか。

(3) 後に続く建築の先行モデル

明治20年代以降、札幌では北海道製麻や札幌製糖（後に札幌麦酒株式会社の製麦所、現在のビール博物館）、札幌麦酒の工場（現在のサッポロファクトリーレンガ館）などが建てられます。大規模で耐火不燃を必要とする工場に煉瓦はうってつけでした。赤れんが庁舎は地元産煉瓦の良質^{あかし}を証^{あかし}だて、これらの建築の先行モデルともなりました^{*5}。

とりわけ、札幌麦酒の工場が煉瓦造で建てられたことが注目に値します。札幌麦酒は北海道の冷涼な気候が適して、日本におけるビール醸造の先がけの一つとなりました。しかし明治時代の中頃、危機に直面します。道外の同業他社が外国製の大型の製氷冷凍機を導入したことにより、冷涼でなくても大量生産が可能となったからです。その危機を打開するためにはやはり、最新設備の導入とともに工場を大規模化する必要がありました。それを実現できたのが地元産の煉瓦と建築技術です。赤れんが庁舎の実績が地元での工場建築の近代化につながりました。

赤れんが庁舎の建築様式

赤れんが庁舎の建築様式について述べて、建物そのものの価値を締めくくるとします。赤れんが庁舎

の建築様式は「アメリカ風ネオバロック」と言われます。そもそも「ネオバロック」とは何であり、その「アメリカ風」とは何でしょうか。

建築におけるネオバロックの源流であるバロックは「荘重端正なルネサンスの古典主義建築に対し、流動的なリズム感、豪華絢爛^{けんらん}たる絵画的印象、劇的な明暗効果など」を重んじました^{*6}。赤れんが庁舎はネオバロックの中でも「フランスの第二帝政様式」に由来し、この様式は米国で大型の官庁建築などに用いられたそうです。

では、アメリカ風のネオバロック、すなわち「米国を経由した第二帝政様式」は赤れんが庁舎のどこにうかがえるのでしょうか。私は、左右両翼などの凹凸^{おうちつ}による陰影に「絵画的」で「劇的」な印象を受けます。

赤れんが庁舎はこの様式をわが国に導入した最も早い例といわれます。当時の最先端であり建築美の到達点を、日本人が消化吸収して具現化したところに価値があるのではないのでしょうか。

木に竹を接いだ？八角塔

赤れんが庁舎の建築様式はこれだけでは片付きません。もう一つ別の重要な要素があります。それはほかならぬ「八角塔」です。八角塔は開拓使本庁舎の塔をモチーフとしたとみられ、あとづけされたものです。開拓使本庁舎はやはりアメリカ風ながら建築様式は「ジョージアン」といわれます。英国ジョージ王朝時代に由来し、古典主義を底流とする様式です。

赤れんが庁舎本体のネオバロックを古典主義へのアンチテーゼと見るならば、古典主義を範とするジョージアン様式を継承した八角塔が乗ったのは、“木に竹を接ぐ”ことにならなかったのでしょうか。赤れんが庁舎にそのような不調和は感じられません。八角塔を載せたことで、むしろ美的な完成度が高まったように思います。

主な参考文献（引用出典を明記したものを除く）

- ・越野武『北海道における初期洋風建築の研究』1993年
- ・越野武『札幌クラシック建築追想』2024年
- ・駒木定正『平井晴二郎の建築をたどる 赤れんが庁舎の設計リーダー』（北海道赤れんが未来機構2025年7月11日研修会資料）
- ・藤森照信『日本の近代建築（上）』1993年
- ・堀内正昭ほか『西洋建築様式史』1995年
- ・松下亘「札幌地域のレンガ史—その実状と若干の新資料—」（『新札幌市史』機関誌 札幌の歴史 第15号1988年所収）
- ・札幌市教育委員会編『新札幌市史』第2巻1991年
- ・同上 第3巻1994年
- ・サッポロビール株式会社社史編纂室『サッポロビール120年史』1996年

^{*5} 札幌製糖工場については、ドイツ人技師の主導で煉瓦を焼いたとの説もある。

^{*6} 彰国社『建築大辞典』1976年、「バロック建築」。